

市場原理に委ねる新自由主義経済は、確かに経済活動を活性化させるようだ。飽くなき欲望が人間を突き動かすからであろう。しかし、この経済活動は貧富の格差を生み出していく。囲碁は強い人と対戦する時、始めに何目か置いて勝負をする。制約なしの自由競争では、資金力、情報収集力がある者が圧倒的に有利である。富める者はますます富み、貧しい者はますます貧しくなっていく。格差は当然である。

機関車が強力な力で引っ張れば、後の客車はおのずとついて来ると言うが、連結器が切れて、後方の客車は置いてけぼりにされると、私は例えてきた。この問題について、浜矩子氏は『国民なき経済成長 脱・アホノミクスのすすめ』で興味深い説明をしている。富の果実が貧しい者にも還元されることを「トリクルダウン」と言う。トリクルは「チョロチョロ」「ポタポタ」という意味で、ダウンは「下へ」である。上から下へとおこぼれの滴が垂れてくるという理屈である。米国のレーガン政権下で行政管理予算局局長を務めたデビッド・ストックマンは金持ち減税をし、金持ちに恩恵を施せば、その果実が経済全体に及ぶと「サプライサイド（供給側重視）減税」と言った。「トリクルダウン」は響きが悪いので「サプライサイド」と言い変えた訳である。彼が隠れ蓑にした言葉であることを認めた時、経済学者のガルブレイスは、ほくそ笑み「昔の人々は現代人ほどお上品ではなかった。だから、トリクルダウン政策でなくて、馬とスズメ政策という言い方をした」と皮肉った。貧しいスズメは馬の糞で潤うという例えである。新自由主義経済を謳歌した英国のサッチャー、米国のレーガン、日本の小泉時代において「トリクルダウン」「サプライサイド」「馬とスズメ政策」は実を結ばず、貧富は拡大し続けた。

貧富の拡大は三つのことを生み出す。① 民主主義が崩壊する。大企業の社長は同じ会社の労働者3~400人分の年収を得ている。ここでは対等な発言力は持てないだろう。沖縄の例が示すように、弱い者の発言は封じられ、民主主義は壊れていく。② 経済成長が望めない。経済成長はエネルギーの消費を意味するから、成長より公平な富の分配を目指すべきであろうが、ここでの、成長の鈍化は低賃金で労働者を使い捨てるので、スキル（技術）の集積ができず、成長ができないということである。また、年収200万円以下の人が1,000万人を超えている。若い人々は結婚し、家庭を作ることが困難になる。少子化は進み、健全な経済成長は望めなくなる。貧困家庭の子どもは6人に1人の割合であるという。夢を持ってない子どものいる国がどうして国力の増進を期待できようか。③ 人心が荒廃し、社会が不安定になる。かつての犯罪はそれなりの理由、事情があって起こった。今は「誰でもいいから殺したかった」という犯罪が日常化している。自分を「無敵の人」と言う。強いという意味ではない。お金がない、家族とも縁を切っている、どんな犯罪を犯しても恐れることはない。虚無のどん底で「無敵の人」と豪語している。かっぱらい、万引きが多く、シャバにいるより刑務所の中の方が安心で、居心地がいいという人々も増えている。貧富の格差はあらゆる面で、人間、社会、国家にとってマイナスを積み重ねていく。

浜氏は、経済活動は成長と競争と分配の三辺の三角形で構成されるが、均整のとれた正三角形になる時、正当なものとなると言う。アベノミクスは成長と競争を強いて、分配の辺が小さいという分析である。経済活動は人間の営みで、人間による人間のためのものでなければならない。社会的弱者に対して無関心、無理解、無神経であってはならない。グローバル時代は相互関係にある。生きることを互いに喜び合う経済活動が求められる。